



13  
341b  
16

十九夜入あまの角

五十二

よきこと

勝善院

南總里見八犬傳第九輯卷之五十二

東都 曲亭主人編次

第一百十勝回中編

延命寺の義成牡丹花を賞む  
富山の崖の念成送題の歌を見る

その上よりなりぬ。こりやうをせはた多き。いふ。成孝仁孝嗣と礼  
登時義成主の狐龍化石の一奇談の感嘆愈々。成孝仁孝嗣と礼  
儀。あふち向ひて物の化石の珠。かた狐の化石。石の作り。近曾奈須野。  
殺生石の事。あつ著あり。又人の化して石の作り。大伴左多彦が妻松浦佐用  
媛又秩父重保が妻の如死の共。其古蹟あり。望夫石の名を遺。唐山  
ものあり。ある。張良が師。とら。黄石公。是。之。あ。れ。も。虚。実。の。事。詳  
る。ま。就。中。狐。の。龍。化。し。る。を。思。ひ。が。け。る。の。事。亦。石。の。造。り。る。一。大。奇  
事。と。い。は。れ。る。大。学。の。和。漢。の。学。の。富。の。必。意。見。あ。る。と。い。は。れ。る。心。麻。と。問

八犬傳の事卷五十二

大塚堂藏

此の礼儀答々然の愚按ありのへも化石の事水土の成り壁言那化石の  
如た鼻紙まれの拭かれ其溪水浸まると四十日及ぶ時ハ化して石ハ做  
るを見て知るべし又那望夫石の如たの萬葉集の遠の松浦佐用媛  
恋糸領巾振りしより負る山の名との歌あれども恐らく古俗附會也  
海邊に立たる天然石の偶人形ハ似るを見て望夫石の名を負せし  
ひの也唐山も望夫石あり和漢同日の談るべし又那張良が下邳の涓橋史  
六韜三畧を傳授せられと黄石公ハ未生の人也寓言のモ其實ハ張良  
已が術と神ハせんとも黄石公との異人を作設く後十三年を歴て其師の  
化して黄石ハ石ハ做りし不逢あるらむと時の人悟せし傳へく故事ハ做り  
たるハの如たの縦是等のありとも求めざるべし然るに必とせざるは這  
故ハ聖人の怪力乱神を語るハ開き左も右もあれ狐龍化石の事ハ憶ふ

他命終るハ及び必石ハ做らんと思ひて石ハ做らざるハありと  
たる迹ハ小芥ハ似る石あり小鏡ハ似る石あり雷斧雷鎚と喚做し  
北越下野を至る大風雨の時鏃ハ似る小石の墜る夏ある主人名付て神軍の矢ハ  
根石と名ふる是乃風ハ吹賜られ沙礫の雲雷の氣ハ蒸れて凝りて形ハ做せる  
の別ハ其石あり不わは是ハ申して之を親ハ狐龍の化石もこの理ハ  
盡て命終らざる時雲雷の氣ハ蒸れて石ハ做りて墜るらんと思ハ疑ハ  
彼ハ只愚按の及ぶ所を稟し上るものハ答詳るは義成主の終ハ  
塚大江政木等の三士も俱ハ感服を并が中ハ義成主の憶も額を拍て大學説  
誠ハ好大阪下野の智玉也學問も亦淺薄なるわ我問ハ每ハ其谷中らむと  
る然るを又這大學あり礼讓のモハ理を究めざるも學問の力ハと稱え  
るハ三士也御意の如くと答ける當下大江仁からず狐龍化石の奇談也

似されども又一奇談を館のきき聞し召さまや一向人の噂の妙子、大禪師の去歲よりて延命寺に在りて法務の暇ある時、忽焉とて那地適に人を見を知る者か、かの如く事日毎老、稍久くも隨ふ衆徒も是を怪むを禪師豫より徒弟念成の教示せらる。我方丈に居る時、倘火急に所要ありて我を請ま欲するが汝本尊を念しまうと。連り小鉦をうち鳴り、ね然り必驗あり。我立地にかつる来てん勢る疑ひせとのれか念成則其意をゆゑ事あふ時、教の如く鉦を鳴りて請来とまふ禪師、果して响ふ心と忽然と成る者、勤務に就くと常の如く念成を訝り、其往復する地方を問ふ禪師、合せらる笑ひて、開き汝們が知る所あらざ。後々に至り、其悟るやあらんとひけり。有徳一程に富山、伏姫神の神社の詣る者時とて、那品山崖の頭、雲霧深く起龍て拜れるる日、これあり。

又樵夫と富山入りて品山崖の邊を過る折、件の雲霧起龍て品山崖の内、讀經の聲の妙あり、日もあり、又も芥の音木と穿り、數金の槌音あり、日ありければ其人、教馬に怪む。人々告をせし言、遂に延命寺へ夢を不ける是、念成の稍悟るやありて、原来師父の暇ある毎に富山、造りて品山崖の龍のあそびあらむと。思へども、觀面を問質、さへいささか、尚疑ひら。解きとて、奇事ありきや。遮莫風聲のきるれば、虚實を知るべもひら。禪師の参より、折を問せぬ、分明らんと言、詳に告宣せ、成考も俱あや。其美の臣等、もやかど事怪れ過れば、然も虚實を測難て、宣し、まひらと、又孝嗣も亦あや。臣等、逆旅に在り、か、其風聲を、禪師の道德を、推し、時、尸解し、等、蟬脱の通力とや、ゆひ、けん、虚談、あら、と、衆評を、義成、主、ち、多、親兵衛が、言具也、大全が、所、亦、所。

以あり因て我憶ふ、大の素より老實なる出家人なり。世の常言ふらむや、正法不思議なり。非除、大の道德熟して通力自在なり。その幻術外道等、一たび死出沒不測のゆゑ、君子に及ぶ信ぜざる。但、大学のそのものも、意見のあらば、欲と向き、礼儀額を衝く。否、臣等とも必然の義の稟上か、その禪師の出沒不測なるも、那幻術の同か、目今孝嗣か、その如く尸解の考へ、蟬脱する。譬、その本訥法師、或は智の愚夫、愚婦も、仍住坐臥、念佛と極樂往生を樂ぶ者、かのうらふ死期を知り、其日に至りて死するも、是あり。況や、大禪師の正直を欲心の、浩佛、其出家の始より、伏姫上の御恩徳を報んと、念考故、那身の延命寺に任持する。衆徒の長とるを榮とせ、い、富山の山執事、て生の涯、姫上の御菩提、昂まらま、願ふ心の移らね、身の生き、尸解と、心神富山に往還する。是

有とまづ、和漢の高僧遷化の後亡骸柩を脱せ、他郷の山澤に遊ぶ者あり。漢籍に尸解とあり。唐の高僧傳に、達摩、羅是、又我園紫野の、一休和尚も、近日尸解の夢あり。只生る、蟬脱する者、是あり。とぞ、則新奇とあり。總古唐山の黃帝の夢、華正日園、遊び、と、故事あり。又天朝、小野篁の生平、真府に往還せ、とあり。是等、恐らく神遊、を、鬼幽冥に遊び、然、尸解蟬脱と、異なる。似れども、這理を、推し、時、大禪師の蟬脱、幻術、ならぬと、知る。足ら、然、今、慈心、其、義を、禪師、の、實、の、禪師、の本意、を、失、事、の、障、ある、所、べく、の、み、ん、只、知らぬ、面、色、を、其、終、を、俟、せ、ぬ。必、做、ま、と、ある、所、へ、と、云、辨、論、の、く、具、ある、義、成、主、の、感、悦、の、ゆ、へ、成、孝、仁、孝、嗣、の、精、論、と、感、得、け、る。姑、且、く、義、成、主、の、成、孝、仁、を、見、る、所、は、是、も、事、を、辨、論、せ、る、大、阪、下、野、を

首を自餘の犬士等と政木大全に至る多。我其言を听く。益を込るも言  
れども。大学ハ言葉葉寡く。辨を好まむと思ひ。那蟬脱の辨の如く人の  
及ぶ所中。我疑ひ水解せり。現小樹者の腰を折。其術約れざる者  
也。好々我ありぬ。大全の逆旅の疲労もあらん。根小屋へ退り。休息せよ  
と。開が儘身の暇を賜りて。その日。餘談ハ果ふけり。徳而その年。致仕の老  
臣杉倉木曾。小森衛士。馬宗浦。安兵馬。兼勝等。うち續けて身故  
了ぬ。又長亨二年。小堀内藏人貞仍。も衰病。ふりて。古人。ふ做らぬ。あれども。杉  
倉武者。直元。堀内。雜魚太郎。貞住。の既。小親の職。を紹。て。家老。なり。又。小森  
但一郎。高宗。浦。安牛。助。友。勝。等。ハ。皆。當。職。あり。然。り。又。その。年。の。夏。四。月  
十六日。小義實。老。侯。卒。り。ぬ。義成。父子。君。臣。の。歎。たり。へ。の。わ。ら。む。其。安。葬。の。夏  
旧。孫。親。族。整。喪。の。ゆ。も。都。考。閑。ら。ぬ。を。看。官。宜。く。猜。ま。へ。介。程。小。近。園

他御の大小名里見の仁義。感悦。或ハ英武。小憚。る者。各。使者。と。好。む  
結。ま。む。却。其。諸。家。ハ。足。利。左。兵。衛。督。成。氏。千。葉。小。自。亂。と。首。史。下。總  
中。千。葉。新。小。孝。胤。常。陸。少。佐。武。高。久。鹿。嶋。の。黨。武。藏。相。模。史。  
扇。谷。山。内。の。兩。管。領。三。浦。陸。奥。守。義。同。長。尾。判。官。景。春。等。和  
睦。の。後。使。者。往。來。し。て。會。盟。小。叛。く。ま。又。甲。斐。の。武。田。信。昌。ハ。家。臣。甘。利  
堯。元。を。使。者。と。し。て。安。房。へ。遣。し。又。三。河。の。隣。尾。判。官。伊。近。の。使。者。錦  
織。機。馬。伊。勢。の。國。司。北。畠。中。將。の。使。者。細。史。平。太。夫。周。魚。等。各。稻。村。の  
城。小。來。聘。し。て。海。上。通。船。の。好。む。脩。ま。む。義。成。則。是。を。受。て。更。小。登。虫  
崎。十。一。郎。照。文。其。女。婿。十。二。郎。照。章。田。稅。戶。賀。九。郎。逸。時。若。屋。八。郎  
景。能。等。と。各。禮。の。使。と。し。て。件。の。諸。侯。の。居。城。へ。遣。ま。し。贈。物。各。差。あり。  
是。より。年。毎。小。嘉。例。と。做。り。て。義。通。の。時。も。疎。く。ま。ざ。り。ける。最。後。小。結。城。の

判官成朝の能化院の權僧正影西と小山大丈次郎朝重と使者と  
あて里見と好む結びか義成も亦、大禪師小大江親兵衛蛭崎照  
文と相副て結城へ遣しける事の趣の前板百二十九回見えたる如し又服  
大刀自の義成の仁義に感服して和順の思ひありといへども女流るれ好む結  
ぶ不及も只稲戸津衛由元との年の春毎使と大川大田許遣して義  
成王の爲ふ千歳と壽延ける是より房總童異りて敢て干戈を動さざる  
四民業と樂して不孝の子不忠の臣る、畊と者ハ畔と讓り商ふ者の  
價と貳せざる路と送るを拾はる夜戸を鎖さざる年ハ荒凶る、鰥寡孤  
獨も饑と凍と比白是義成主の仁義善政の餘澤るれば民の是を仰ぐ  
る日月の如く赤子の父母と慕ふ似たり然れ里見の封内かゝの如く童異る  
るハ八犬士等の俱ハ休暇の命とゆる各其居城ハ在り其内中四犬士稻

村ハ在勤して代るハ半年と以て但年首五節供の拜礼臨時吉凶の  
參勤或ハ事の決りか折ハ八犬士皆參集ひて國政ハ與りけり。既ハ  
文明ハ十八年と盡る且長亨も亦ハ二二年ハして延徳と紀元  
せらる延徳と又明應と改りぬ嘉吉元年より明應九年ハ至りて星霜  
六十年と歷り。這年四月十六日、結城落城の昔と偲ふ季基朝  
臣の六十年忌義實老侯の十三年忌小丁るどりてその日義成主ハ早天  
より稻村の城を出て延命寺へ參詣あり而家老杉倉堀内有司近習の  
毎伴當より又八犬士も參會目と既ハ一々廟墓焼香の事果て義成主ハ  
客殿ハ在り住持、大禪師ハ沙弥念成をりて看茶の礼あり八犬士大塚信  
濃成孝犬阪下野胤智犬江親兵衛仁犬山道節帶刀忠與犬村大  
学礼儀犬川長狹莊ハ義任犬飼現ハ兵衛信通犬田豊後悌順兩

家老杉倉武者助直元堀内雜魚太郎貞住をけりける折々這客  
殿の庭に牡丹花開満て紅白色と交へる香風馥郁とて得ぬれぬ  
看弄あるれ義成王の立難て端近く居り、大禪師が法談を  
憶む時を移し其語次、大ののち、臣僧當山に住持をぬる素より  
情願のいづれも恩命黙止かけられ既七十八年を厭止り、尚方如徒  
弟念成八年來ふ作りぬ尚壯年ふられも佛学既煉熟して法脉を嗣  
軍の傳燈の素懐を遂て身の暇を賜り多く欲を言えと饒させぬ  
か、と亦他事も多請稟せ、義成王沈吟して其情願の今創を  
禪師當山入院の比老館の論ひて十稔と契りありと今さう林示ぬ  
けられも我年来疑思由あり禪師の身の暇を毎ふ忽焉とて寺に居  
らば留守る念成若う所要あり、急請多く欲する時の本尊とら念

あて連りふ鉦をうち鳴せ禪師の亦忽然と寺にかけの來ぬふあはれ  
又富山入る者那品出禪師の經を續聲ゆえ又有一時の木を穿  
ら數金の音する日も是あり、あられも其形體を我其嚙とせと稍久く  
るの暇れども折る折るに問ひあり、あはれと問ひて、大の驚く色  
る、然れ且始より稟上ん臣僧祝髮入道せよ、施王の歎待ふあはれ  
敢亦火食せむ日毎に蔬菜果子を生食して只水と飲の願ふ所伏  
姫神の御菩提に當家の御子孫敬奉目と祈ると間断る、あはれ故の身の  
當寺の方丈に在り、心の富山の品出に在り、約莫かくの如くふ喜怒哀  
樂の境を免れ榮枯得失好憎哀貶、掛念せざれば我身の有と忘る時  
あり、あはれとて、あはれ欲する地方われ、忽焉とて適する、還る欲されば  
忽焉とてかへらるる、然れば、脚地を踏ま、雲が駕ふあはれ、出





没思ひの隨るは是は何等の所以なるや。我のまご是を知らぬ我知らざらん  
 自在なるの那世を厭ひ山に入りて遂に形を煉り性を易て品居水飲修  
 して神仙の倣る者不似たり。但神仙のまごは佛も亦雲不駕り波と踏む  
 法術を量るるとして佛を稱て金仙とを开い左も右もあれ臣僧坐没自由と  
 疑一死とわれが立地小悟り人召時の遠近も空をよめて念成が請ふ  
 とありく鳴き鉦の富山ありても我耳小入り壁言唐山魯の曾參が至孝  
 るるを日暮るるまごかへさる時其母俟不樂て則門小立出で望む杜松を  
 啗時ハ曾子の胸忽地痛て母の待とを知る故ふを死てかり來ぬるが如し  
 蓋念成が老実多師の仕方の誠心ゆゑ鳴き鉦を幽冥に通まは  
 るるべし世の神佛を祈る者ハ利益其人の至誠深信在り誠ハ必神の  
 如し那鉦念成が鳴き鉦をふらされば遠く我耳小入るこゝろ。是其誠を知る

べの。今少小往る文明十六年の冬。這白濱小波濤の打寄ける異圓  
 材あり其材の周匝十圍許。長ハ一丈五六尺るべし。其色黒くして香氣あり。  
 聊削合て焼試る疑ひもた沈る。臣僧則木匠小課て其材を  
 斫せて分ちて五十五材とを是を富山の品出小藏めり。多れども人は是を知  
 らぬ。是より後臣僧暇ある毎小飄々然とて富山の窟小造りて旦夕ハ  
 姫神の奉為小讀經をなす。晝ハ則其材を刻て須弥の四天神王と作  
 一聯を刻ゆる。約莫這細工の歲月十餘年申て稍落成仕らぬ是を當  
 寺で彫刻せざるの寺内も尚俗氣あり。今の法師ハ寂滅為樂の教と思  
 へで富貴利達を願へ入又富山の神窟小詣る者も椎も臣僧と見る  
 ことと況刻做しる佛像あるを知らざるの雲霧起龍と係小ぬ其



此是佛種を執るの爲に臣僧嘗鋸山を相まふ正一是房總第一番の  
 佛地今如の如く做き時三百年の後に至りて我座あり種佛五十體十  
 倍せり五百の石佛を造り立て伴の山措者あり後未知るべし是宿願を  
 果し急速の身の暇を賜りて富山入りて終を俟ん這美の館を稟上るの事あ  
 り大土達も夢あへ昔年水陸施餓饑の折各所藏の靈玉を我に返さんといひ  
 去と我這宿願ある故に代る小羅龍の玉をのせてせらるる其羅龍の玉の皮  
 ぞ金蓮金花と做りて散乱して消滅あり今按ざる蓮の其字押ひ従ひ  
 車に従ひ是れ小従ふ輪回車の回る如し則是當館の仁心善政の積徳を  
 恩怨忘報の輪回正不盡るの兆るべし又各所藏の靈玉仁義我八行の文字あ  
 り是れ君仁にて臣も亦仁るべし別仁義八行と名る者なり老子小所云大  
 道廢れて仁義起ると是れ所云大道に至仁至善之人至仁至善れば不仁不善

と名くべ死者なり大道廢れて不仁者あり悪人あり於是乎聖人仁義礼智  
 孝悌忠信の八行を立てて人小教人を教言めり和殿等八犬の俱八行具足此  
 人何ぞ其文字の見れる靈玉の眞助の負んや縦其玉あり各八人の一  
 生涯の姫神看葉ゆへ目今玉を我に返しねりて四天の玉眼おせん古俗  
 良將の勇臣の殊小勝れると四人擇て是を須弥の四天小擬へりて四天王と  
 稱考者妙くも所云源頼光朝臣小従事せる衛府の勇士渡邊綱阪田  
 公時ト部季武碓氷貞光是れ這他源義經の勇臣龜井虎岡伊勢  
 駿河義貞朝臣の勇臣栗生條塚畑巨利皆是人の知る所故擧る小違中  
 ぶ然る當館の那四天王一倍せる八犬士の賢臣あり這八大を四箇小約めて四  
 天の八目と做き時八犬中て四天入天一小従ひ大八従ふ四天中て八犬大八小従  
 ひ小従ふ八犬變りて四天と做りて永久當家の鎮守さふ柳亦よくはと云

辨論精細るのければ義成主と首を諸大ニ家老感服して異議者者  
 るるける升が中成孝胤智仁者かふや目今師父の教諭成就思合  
 事その人臣等が感得の靈玉の生平の護身囊の藏ゆるるる月の朔望毎  
 合出でて拜者のを介する昨日の例の如く出でて拜まほくも我の程の文字の耗  
 故の白玉の作りおけり開の臣等三人の玉のをこの這美を自餘の犬士向ふ道即  
 大學莊の現八豊後等が藏ゆるる皆白玉の作りぬらんと告げ現八校を出て  
 又只玉の文字のをるる臣等八人か身在る瘧子の形狀牡丹の并化の似たる  
 隣國和睦の比より其瘧子年々薄く做る隨ふ本月に至ると皆銷耗  
 迹る作りぬ然とも義兄弟等が瘧子の或の脚或の肋背殿股肘を在  
 故の衣を隠れて人か知られず其身中も見えざるがあれも臣等が瘧子の面部か  
 見え入らる鏡と照せばみづく見るかかたらは是御覽せんと片頬と示せば我

成王も大師弟も直元貞住に至るまで左見右見の俱ふ事現大飼の  
 面部の瘧子の近曾孫く作りぬ既にして銷耗の心つたるは自餘の  
 諸大も恁ぞあゝ奇く妙なるふとと又忠與礼儀義任悌順の膝と杖を  
 言語齊一なるや事と物と因果あり因り始り果り終る我々が玉の文字と  
 身在る瘧子の則是因り尙ある玉と瘧子の何ぞして伏姫上の御子と  
 知る由あり這面箇の照据ありて當館に徴使れて功名共し做りて後玉の  
 文字も身の瘧子もあふぞ作りぬ是果に這奇事の終る玉の瘧子の瘧子  
 ありて垢清白とまきく誠小佛法音重の方便役行者と伏姫神の利益造  
 化の小児の所為の秋思議まきく甲一句乙一句送る語と續け意重と演る  
 各玉と命出り護身囊から載て俱ふ大返下けり當下義成主忻然と  
 犬士はうち向ひて現物本末あり事終始あり我今日這牡丹亭の來て



發明とされし。もいへば曾あつて分明なり。と云ふ。大い推林示めて大坂漫  
 語を稟し。和殿は是生智之何もの知らざる。と云ふ。酒家小讓はこかひと  
 推辭を義成王守あま。さるゝを禪師下野が智玉するも。知らざるを知らざる。  
 是則上智之曲学者の知らざるも。知りびとを恥とて。強々臆説を傲ま  
 故に胡慮ふるると云ふ。禪師の只是神識之何を一言一句を惜とて我の  
 ら世の人此疑を解ざるや。と徴ふ。大い阿と上座て姑息して答ふる。仰言ふ  
 理り。那八房の犬の死も。又八犬士出身世の皆臣僧より出。それ件の隠  
 微と鮮ん。必人小讓る。然と漫小推辭。行り。今臣僧が一解。伏  
 姫神の教不依れり。徐小聞。食ねか。と謝して則解ていさ。大嘗本草と  
 按さる。牡丹の牡丹。這故小宿根より叢生。因て名けて牡丹といふ。是小由之  
 之を見れば。牡丹は皆牡丹の。而て純陽の花。又八房の犬。其母犬死。と裡

見小乳育れる。牡狗。生涯對ま。死牝狗を。是亦純陽の畜生。之を  
 之。那身の雜毛形狀。牡丹の花。似て其數八。八。則陰數の終。陽中  
 陰。十一。不通。故小陰數の終。とせ。老侯。這大を八房と名け。ひ。後竟八  
 犬士。安房。小あり。聚ふ。死識。又八犬士。各其父母。あり。この。那宿因。推  
 と。時。伏姫。上の。御子。て。胞兄弟。同。約莫。這八個の。弟兄。皆。男子。之。純陽  
 之。且。各。身。在。る。所。の。痣。子。形。狀。牡丹。の花。似。る。那八房。小類。る。元。自。亦。是。弟  
 兄。純陽。の。義。を。表。せ。し。る。陽。獨。不。立。陰。獨。不。立。故。小。大阪。大塚。  
 幼。仙。に。時。より。故。あり。俱。小。女。裝。て。名。亦。信。乃。毛。野。る。と。女子。小。似。る。亦。是  
 陽。中。の。陰。之。且。大塚。の。濱。路。と。結。髪。の。少女。あり。又。大村。の。離。衣。と。小。賢。妻。あり。  
 則。是。陽。の。獨。立。する。の。義。之。小。濱。路。離。衣。及。大江。の。母。沼。蘭。は。皆。是。良。善  
 心。列。の。婦。人。る。非。命。小。那。身。と。殺。せ。し。果。報。虚。不。似。これ。も。亦。故。あり。





ひめめ 非命の者も。蒲團の上で病臥者。姫神何を仇々。神薬を授けんや。  
是非由てこれを觀れば。愛され祥ふひと祝せ。大士等二家老も俱お千歳をぞ  
唱ける。當下義成跋然と謝して答ふ。我身素より薄徳るれも。尚禪師の  
お如く。實ふ幸甚。却須弥の四天塚へ。則禪師先達。八犬士を總  
轄せ。又鋸山植ると。種佛五千軀。政木大。全江田宗。及盛。下知。て  
く。支役を出さ。死然と向れて。大の頭を掉て。否然る物々。は事。の要る。那里  
へ念成と。支役。十四五名。を事足る。種を植る。少壯兒を。軍と。を老人の植  
たる。發生。死に。若る。れ。却。這事。を果。念成。お。當山。の。住持。を。仰。付。さ  
ぬ。ひて。臣僧。へ。速。お。身。の。暇。を。賜。る。べ。願。ふ。を。義。成。主。ち。開。て。開。左。右。を  
異。日。制度。せ。長。談。ふ。日。の。閑。さ。卒。退。え。て。立。お。八。犬。士。三。家。老。の。伴。の。士。卒。と  
促。聚。合。て。稻。村。の。城。へ。俱。一。お。け。の。愆。而。有。司。奉。り。て。四。天。を。斂。む。は。素。樸。の。厨

子と石の韓榎佛像五十軀と斂む。小瓶を。石陶の。玉面を。課する。約  
莫。平。日。許。ふ。く。送。り。作。り。出。せ。ぬ。大。禪。師。の。念。成。を。將。て。八。犬。士。と。共。侶。お  
許。す。の。支。役。を。從。り。富。山。の。岳。崖。へ。赴。て。大。禪。師。の。作。立。て。開。眼。考。る。四。天  
佛。像。と。半。ま。る。お。其。佛。像。五。千。軀。の。念。成。則。受。會。て。准。備。の。瓶。お。斂。む。車。お。登  
ま。支。役。お。推。さ。せ。延。命。寺。へ。か。つ。多。次。の。四。五。個。の。徒。弟。と。俱。お。支。役。お。又。其。車。を  
推。さ。せ。鋸。山。と。投。て。お。せ。り。小。程。お。八。犬。士。の。須。弥。の。四。天。神。王。の。木。像。と。四。固。の。長  
榎。お。ろ。ち。斂。て。先。隊。配。と。定。む。お。東。方。へ。大。塚。大。江。西。方。へ。大。川。大。飼。南。方。へ  
大。村。大。田。北。方。へ。大。阪。大。山。各。支。役。を。從。り。立。別。れ。て。路。次。の。を。お。大。一。人  
岳。崖。と。出。で。大。士。等。お。告。て。お。念。成。鋸。山。へ。赴。け。明。日。より。寺。お。留。守。す。  
酒。家。の。這。里。を。祈。禱。し。て。白。濱。へ。還。り。て。各。よ。勉。め。其。四。天。の。玉。眼。の。和。殿。を  
感。得。せ。靈。玉。を。も。造。り。か。是。各。分。身。の。善。神。お。相。同。と。并。と。瘞。る。地。方。お。

西家豫表と建てる。其地を穿りて一丈二尺は是地枝十二生肖の象る塚と  
 築くと十尺は是十幹の象る之四天王の配分其東西南北を分ちて長  
 櫃不寫の塚の表へ東不柳西不楓南不檜北不冬青を栽ると好とを努む  
 ちそと説諭せ大士等都てあるめて各其投を方お到る。安房の四郡中て廣  
 かね一兩日中て四隅の四隅を穿りて是より先地方の村長社客等四圍守の  
 下知よりて稲村より石の韓櫃と車りて牽よせ来て四天の昇れて来るを俟て  
 四隅皆異なるね大士等各其表木あり地を穿せて天神王と素樸の厨子に  
 儘石の櫃を斂て是を瘞るふ。大の教違ふとる。徳而塚と築はせ  
 栽る樹も折る五月雨の時候る枯る者るりけり。八大士各這美を做果し  
 稲村の城へ来る程ふ又念成の徒弟等と俱佛像五干軀と鋸山へ瘞果て  
 延命寺へ来るより是より後大禪師の連る退院と請宣あり。

成主已ことば念成と延命寺の三世の住持とる。則照書を賜りて大を  
 別坊料を宛りて一とあり。大の固辭て取て受む先退院の欲びを宣さん  
 と。稲村の城へ来る折八大士の取取て君邊に侍りて義成則。大を召  
 るて對面する其礼果て。大の命。臣僧多事の宿願と遂て富山へ入りて  
 還らんと思へ見参の今日と涯りる。就て告宣さす。思ふ富山の品出原  
 伏姫神の禊舎と置て衆人お拜せぬ。姫神の御本意あり。何とされ。姫神  
 原是富山の。觀世音の化現。然らば姫神を拜む。欲者衆生の富山の峰の觀  
 世音。詰る不如。臣僧は這神慮を知る故。那宸筆の勅額と。峯の背を  
 制衣の石室藏めまらぬ。今よりて後伏姫神を大悲の奥の院とて拜せぬ。  
 利益御子孫お及せぬ。然らば臣僧の那品出原を鎮壇して長く定不入。欲  
 去とのひ八大士と見りて和殿等も歩らり功成名遂て身退る。謙の上吉

者へ何ぞ見子職を譲りて致仕して隱逸を樂まざるや。以てたのり日足の  
 館願くは今日より長く我身の暇を賜ふべし。と云ひ詠らば身は起して走りて  
 庭より岩と見えしが。忽然としてあひらけり。義成主も八犬士も。這光景も果て  
 俱ふ其方を目送るのこゝ又よりも走りける。姑早て義成主も悔て八犬士も詔らる。  
 曩も我富山姫の勅額とて神體示し。且富山も岳崖も先念と置。を祈心  
 ろり何と云れ神の形質る者。佛ハ則影像あり。是を天地も辟言れ。神ハ天  
 佛ハ地也。又人身も辟言れ。神ハ則魂之佛ハ則魄の如し。神ハ陽佛ハ陰。陰陽の  
 理と知らざり。四祀る遙祠へ大和も三輪の神ハ只空扉門のこゝして。神殿  
 るを見ても知るべし。有徳れ今より。峯の奥の院と我姉神安居地と。春秋毎  
 祭るべし。這を封内を。士民も遠く御示し。絲と仰ふ。犬士も感服して。猶餘談  
 ち及びけ。介程も。大の伴當も。禪師も。做りぬと。知れ。教馬は。噪ぐと

大らるらむ。躬く延命寺へ走りぬ。住持念成も告ぐ。念成も亦教馬にて。  
 原來師父の富山も。定入りぬ。今一番對面せま。りけれと。  
 猛可の伴當と。將て富山も。赴く路を。日の暮。如。準備の。焦火を。掉照る。そ  
 當晩那品山屈も。走り着て。見る。怪む。品山屈も。最。凄。に。磐石と。建。搦。其  
 入処を。塞。如。縦。力。雄の。神。も。輒。開。く。も。わ。ら。ざ。る。念。成。憶。も。嘆。息。  
 あり。原來對面を。饒。され。品山屈も。向。ひ。て。跪。け。念。佛。て。退。り。稻。村。殿。不  
 告。宣。え。と。其。方。と。投。て。程。も。既。而。て。天。の。明。け。然。び。又。其。の。旦。大。江。親。兵。衛。  
 義成主の仰ふ。大禪師の在処を。索。て。君。命。を。傳。ん。と。伴。當。と。從。て。富。山。を  
 投。て。程。途。も。念。成。も。逢。け。件。の。趣。を。知。り。て。甲。斐。有。と。思。ふ。只  
 得。念。成。と。共。侶。稻。村。の。城。へ。り。多。事。恁。々。と。穿。え。上。れ。義。成。則。念。成。を。召。よ  
 せ。み。其。委。曲。と。穿。ぬ。念。成。も。那。品。山。屈。を。塞。は。る。磐。石。も。非。如



ちるまのりみ  
大と行く  
ちんごまのりみ  
親女衛念成  
ときまのりみ  
富山小列介



あつたさ  
ちんごまのりみ  
ときまのりみ  
ちんごまのりみ  
ちんごまのりみ

文漢堂藏

百千人の替力ありとも。輒く啓くべし。其大石不書寫去。歌あり。あも亦  
浮世の人此訪来れば。空高く雲不身をまうせんと。讀れり。の外。見る所。由ハ  
と。と。義成王。打て。開。古歌。新詠。と。向。親兵衛。答。古歌。有昔  
建武の比中納言藤房卿。出家。隱遁の後。み。保山子と號して。越前。の  
雁鳥巢山。幽栖。去。時。新田の勇將。畑六郎左衛門尉。時能。其頭。陣。て。あり  
けれ。士卒。水。と。微。難。山。深。入。程。藤房。入道。見。出。て。訝。り。其。出。処。を。問  
ふ。實。を。告。る。ぞ。只。東國。の。者。と。の。答。め。り。か。士卒。等。の。之。訝。り。て。軀。て。か。り  
あ。り。時。能。不。告。る。時。能。能。て。開。必。藤房。入道。み。て。ま。げ。れ。我。の。て。見。ん。と。て  
み。づ。く。其。地。方。不。至。る。不。王。ハ。又。興。立。去。り。て。坐。し。る。石。不。寫。送。去。一。件。の。歌。あり。の  
事物。不。見。え。て。入。禪。師。ハ。是。を。思。ひ。を。て。其。古。歌。を。て。心。操。と。示。され。る。ふ。と。ふ  
考。照。具。る。けれ。義。成。の。嗟。嘆。不。堪。也。原。來。幾。番。訪。ふ。と。も。對。面。稱。ふ。べ。し。ま

と。竟。ふ。の。議。ハ。已。り。是。の。後。富山。入。る。者。折々。那。品。出。屋。中。讀。經。の。聲  
ま。る。と。つ。こ。あり。徳。而。許。多。の。年。と。麻。止。里。見。四。代。の。國。王。實。亮  
と。富。去。一。の。暗。記。の。失。の。時。樵。夫。の。富。山。入。る。者。あり。一。日。一。個。の。老。僧。忽。然。と。出。く  
當。實。亮。を。作。る。べ。し。の。時。樵。夫。の。富。山。入。る。者。あり。一。日。一。個。の。老。僧。忽。然。と。出。く  
來。て。送。不。推。進。と。喚。て。い。や。う。我。ハ。大。禪。師。ハ。汝。我。為。不。稻。村。の。城。ハ。參。り。て。實。亮  
申。つ。か。御。父。祖。の。俊。徳。稍。衰。々。内。乱。將。起。ま。す。宜。く。仁。義。忠。孝。を。宗。と。し。て  
善。政。を。怠。り。め。る。と。言。傳。ふ。奴。等。忘。れ。そ。と。宣。示。し。て。走。る。と。奔。馬。の。像。く。忽。地。見  
え。ま。る。り。け。り。あ。れ。ど。も。件。の。樵。夫。の。言。の。思。々。不。憚。り。て。這。美。を。訴。げ。り。けれ。も。果  
て。京。宅。も。違。は。り。け。り。あ。れ。ど。も。是。後。の。話。ハ。是。より。先。ハ。大。田。豊。後。が。居。城。せ。る。那。古。の。浦。ハ  
一。名。を。鏡。の。浦。と。い。ふ。這。地。方。の。棘。鬚。魚。の。安。房。の。名。物。を。れ。平。生。を。國。守。へ。獻。じ。て  
り。て。食。膳。の。料。と。す。入。政。木。大。全。が。居。城。せ。る。大。田。木。の。棘。鬚。魚。も。上。總。の。名。物。を。こ  
ども。吹。笛。遠。け。れ。守。の。食。膳。不。備。れ。ば。遮。莫。大。田。木。の。漁。夫。ハ。猶。誇。り。て。我。浦。の

棘とひのうを長魚の那古を勝れりとひと大田豊後後少知りて有年の春塩鯛を政木大  
 全の贈ると歌を詠て遣しける其歌曳おろま霞の網おろる浪の花さら鯛  
 那古の浦裏とあり一怒政木大全も亦塩鯛と大田小贈る歌をて返し  
 とま其歌あの海八重の潮路のさら鯛名小大田木をうのとらん後小  
 義成王這りを傳へて贈答共の感心のあまり又大田木の棘長魚をも  
 食膳お備よとて甲乙俱小徴されか大田木の浦人飲びて遂小恒例小做り小  
 けの徳而義成の徳を慕へる近國の氓多く取ひ來て上總の郡縣もま敏昌  
 あり一怒政木大全利害を演て請ふて処々の要害小城を築ホくと勘がら  
 此後竟小四十八个所小至り一か世の人相傳へ是を里見の四十八城といけら  
 是ら下へ又本回の下編小解分ると聽ねかし

南總里見八犬傳第九輯卷之五十二終

